



川越市元町出土 人物埴輪（川越市立博物館蔵）

第9回企画展

古墳時代の川越

1. 古墳時代へのいざない

川越市立博物館では、平成8年3月23日（土）から5月12日（日）まで第9回企画展『古墳時代の川越』を開催いたしました。

埼玉県内の古墳の研究は児玉郡や比企郡、埼玉古墳群のある北埼玉郡などを中心に進められ、川越を中心とした入間郡はあまり取り上げることがありませんでした。これは首長墓である前方後円墳がこの地域に少ないことや古墳の発掘調査例が少なかったことなどが原因と思われます。

今回の展覧会では、近年充実しつつある当地域の古墳や集落からの出土品を一堂に集め、入間川水系と新河岸川水系、ふたつの河川の流域ごとに

展示しました。弥生時代以来の農業生産力を背景にした入間川水系。畿内の政治的介入によりこの時代に目覚ましい発展を遂げる新河岸川水系。このふたつの流域はそれぞれ特色ある古墳文化を形成し、後の歴史展開にも大きな影響を与えました。

ここでは、展示資料の写真を交えながら、展覧会を振り返ってみたいと思います。

2. 入間川水系の古墳群と集落

入間川の支流である小畦川流域は弥生時代中期より開発の始まる地域です。5世紀には女堀遺跡（川越市）、御伊勢原遺跡（川越市）、上組遺跡（川越市）、新嘗井遺跡（川越市）などの集落群が営まれました。これらの集落を拠点とした大規模な開発は



牛塚山6号墳出土 馬形埴輪 (坂戸市教育委員会蔵)

豊かな耕地を生み出し、これを背景に在地首長が誕生します。古墳はこうした首長たちの墓です。

6世紀初頭には前方後円墳の三福寺1号墳(坂戸市)やどうまん塚古墳(川越市)、下小坂3号墳(川越市)などの大型円墳が築かれました。これらの古墳からは小型鏡や挂甲、武器、馬具などが出土しています。強い武力を背景に地方を統治した在地豪族にふさわしい副葬品です。これらの有力墳を中心に古墳群が形成されます。

6世紀後半、古墳の築造はピークを迎えます。大類2号墳(毛呂山町)、雷電塚1号墳(坂戸市)、新町1号墳(坂戸市)などこの地域の代表的な前方後円墳はこのころ造られたものです。6世紀の末に造られた最後の前方後円墳、牛塚古墳(川越市)からは金銅製指輪や銀装刀子などの渡来系遺物が出土しており注目されます。これらの品々は被葬者と畿内政権との強い絆を示すものです。

7世紀後半になると当地域では、比企地方の影響を受けて胴張り式石室をもつ古墳が造られました。また、越辺川上流の西戸古墳群(毛呂山町)では、河原石積み小石室をもった特色ある古墳が造られます。鶴ヶ丘古墳群(鶴ヶ島市)は勝呂廃寺(坂戸市)の建立に関わった古代豪族の墓域と考えられ



川越市古谷上出土 人物埴輪

ています。古墳の主軸方向や石室の構築技法など古代寺院の基壇との共通性が指摘されています。

3. 新河岸川水系の古墳群と集落

新河岸川水系の仙波台地は、入間川水系と異なり、弥生時代の遺跡は現在のところ確認されていません。古墳時代になってから急激に遺跡数が増加する、新興の地域です。小仙波4丁目遺跡(川越市)や弁天南遺跡(川越市)、弁天西遺跡(川越市)などでは4世紀代の集落跡と方形周溝墓群が多数調査されています。

4世紀末にはこの台地上に入間郡最古の古墳、三変稲荷神社古墳(川越市)が築造されます。この古墳は一辺22mの方墳で畿内政権から下賜された罽龍鏡や碧玉製釧が副葬されていました。また墳丘の周囲は壺形土器で圍繞されました。しかし、方形周溝墓群内に造られたことや方形墓の系譜を引くことなど、被葬者が集落の規範に大きく制約され首長として自立できていない状況も伺えます。

当地域の5・6世紀の古墳の様子はよくわかっていません。仙波古墳群(川越市)から出土したと伝えられる遺物や市街地から出土する埴輪などから、台地の縁辺に点々と古墳群が造られていった様子が窺われます。また、新河岸川支流の柳瀬川



下小坂古墳群出土 装身具（東洋クオリティ・ワン蔵）

流域には山下後古墳群（所沢市）のような小円墳群が造られます。これらは木棺直葬で埴輪をもたないなど仙波台地の古墳と著しく異なります。

入間川水系が最後まで古墳を造り続けたのに対して、新河岸川水系では丘陵や台地の斜面を穿って墓室を設けた横穴墓が造られます。横穴墓は5世紀末に北九州に現れ、6世紀末に埼玉に及びます。当地域の代表的な横穴墓群としては滝の城横穴墓群（所沢市）や川崎横穴墓群（上福岡市）、岸町横穴墓群（川越市）などが挙げられます。

4. 古墳から古代寺院へ

古墳は7世紀後半以降、次第に造られなくなります。こうした背景には、身分に応じた墓の造り方を細かく規定した大化の薄葬令の公布や仏教思想に基づく火葬の普及などが考えられます。古代



下小坂3号墳出土 珠文鏡（東洋クオリティ・ワン蔵）



牛塚古墳出土 金銅製指輪（東洋クオリティ・ワン蔵）

豪族たちは、古墳に代わる宗教的な拠り所として古代寺院を建立するようになりました。

入間川水系には7世紀後半にいち早く勝呂廃寺が創建されます。霊亀2年(716)に高麗郡が設置された後は、女影廃寺（日高市）や大寺廃寺（日高市）が相次いで建立されました。また、正式な発掘調査によるものではありませんが、新河岸川流域の寺尾廃寺（川越市）では9世紀後半の単弁七葉蓮華文軒丸瓦が採集されています。新河岸川水系で唯一の古代寺院として注目されます。

今回の展示に当たり埼玉県立さきたま資料館副館長増田逸朗先生、川越市文化財保護審議会副会長小泉功先生には様々なご指導・ご教示をいただきました。心より感謝いたします。

（学芸係 岡田賢治）

弘化三年相州野比沖渡来軍艦並人物図

弘化3年(1846)閏5月27日、米国東印度艦隊長官ジェームス・ビートルは艦船を率いて浦賀沖に現れました。ビートルの使命は日本国沿岸諸港の開港の可能性を確認し、できうれば両国通商の路を開くことにありました。艦隊は旗艦コロンバス号とヴィンセンズ号の2艘で、コロンバス号は2,480トン、船丈58.5m、乗員800人、またヴィンセンズ号は700トン、船丈38.6m、乗員200人の艦船で、共に帆船でした。交渉は浦賀奉行大久保忠豊を介して行われましたが、幕府は明確に謝絶したため6月7日静かに日本を去っていきました。この時期相州沿岸の警備を受け持っていたのは川越藩です。警備地区は三浦半島の大津・走水・観音崎から浦ノ郷・三崎にわたる一帯で、当然ビートル来航時も川越藩は江戸湾警備の最前線にいたわけです。警備の一端は藩士内池武者右衛門の著した「先登録」に記録されています。「先登録」とは沿岸警備隊の中で首尾よくビートル艦隊に一番乗りをした武者右衛門の武勇伝で、異人たちとのやりとりを詳しく記しています。

この「弘化三年相州野比沖渡来軍艦並人物図」は川越藩士だった喜多家に伝来したもので、ビートルが率いてきた2艘の艦船と乗員の姿を描いています。一般に外国船渡来関係の絵画資料は「黒船来航譜」などとも呼ばれ、多くの資料が残されています。これらは記録や情報伝達の手段として作成されたもので、とりわけペリー来航以後は数多く制作されました。しかしこれらの図譜は模写

などが多く、オリジナルを探すことや作者を限定することはきわめて困難といわれています。この「弘化三年相州野比沖渡来軍艦並人物図」は幕末頃のものと考えられますが、不明な点もあります。

この資料と同系統のものは神奈川県立博物館所蔵の「亜米利加船竝人物図」と鳥取県立博物館所蔵の「癸丑墨夷入津図附船人物図」が知られています。神奈川県立博物館のものは福山藩主であった阿部家に伝来したものです。弘化3年当時、福山藩主阿部正弘は老中主座として外交問題を処理する第一線に立っていました。また鳥取県立博物館のものは嘉永6年(1853)のペリー来航時の図譜ですが、その中の一点は明らかにビートルの軍艦を描いています。この図譜は鳥取藩主池田慶徳よしのりの監修によるものです。池田慶徳は水戸徳川齊昭の五男で、池田家に養子に入って藩主を継ぎました。徳川齊昭は幕末の尊王攘夷運動の中心的人物で、嘉永6年のペリー来航にあたり幕政参与となり、幕府の外交問題に関係しました。慶徳はこうした父の影響を受けて外交問題に強く関心をもったことが推測されます。

このように神奈川県立博物館と鳥取県立博物館のものは、外交情報を入手できる立場の老中や藩主の元に集められた資料ですが、この「弘化三年相州野比沖渡来軍艦並人物図」はそれとは大きく異なります。川越藩の相州警備に携わった一藩士の家に伝わった資料として貴重だといえます。

(学芸係 大野政己)



艦船図(コロンバス号)



人物図

既に蔵造り資料館へ足を運ばれ御存じの方もいらっしゃると思いますが、昨年末、中庭及び煙草蔵（二番蔵）の展示空間が整備されました。



写真① 整備後の中庭

写真② 身障者出入口

そこで、その整備の具体的内容について触れてみます。まず、中庭整備(写真①)についてですが、この整備で強調したいことが有ります。それは、車椅子使用者等の身障者入館への対応を第一に考えた整備であることです。通常、資料館のように伝統的な建物の公開施設の場合、身障者対策が施されていることは非常に稀です。それは、新しい公共建築物のように身障者対策を設計の段階から考慮するのはあまりに条件が違っていることや文化財に指定されていることも多く、基本的に出来る限り現状変更を行わないことを条件に公開するという考えがあったからと思われまます。しかしながら、身障者の方々からの入館に対する要望は非常に強く、なんとかこの要望に応えるべく整備計画のなかに対応策を盛り込んだわけです。前置きがだいぶ長くなりましたが、具体的には、車椅子での入館及び移動が容易なように出入口を建物正面南隅にあった管理用通路(写真②)としました。そして、道路との境に当たるL型側溝は切り下げ、そこからの立ち上がりをスロープ状としました。つまり、出来る限り段差を無くす配慮を施したわけです。また、砂利引きであった部分を同じような配慮から御影石による敷石工事を資料館敷地内最奥まで施しました。さらに、煙草蔵（二番蔵）・

文庫蔵（三番蔵）の出入口前にもスロープ状踏み台を設置し、土蔵内部及び展示物の見学が容易なように配慮いたしました。また、これら車椅子使用者等の身障者入館への対応の整備のほかに、柵工事・雨水の排水工事・植栽整備等も実施いたしました。雨水の排水工事では樋からの水が自然浸透するのに任せていたため地面に水たまりが出来易く、非常に不評であったものを下水に落とすことで入館者への配慮を図るというものでした。また、特に植栽整備では庭の四季折々の表情が楽しめるようにいたしました。

次に展示空間の整備(写真③)ですが、煙草蔵の



写真③ 整備後の煙草蔵 1階展示空間

一階を中心に行いました。展示ケースや照明及び展示台の増設等が主で、因みにケースについては埃対策をとるとともに、補強を施し、化粧クロスを貼り、照明も美術品用のものを新たに設置いたしました。

これにより明るさが増し展示物はもちろんキャプション等も見やすいものとなりました。また、二階についてはカーペットを新しくするとともに、消防唧筒も新たに展示いたしました。

最後に、今後は身障者対策として、サインの整備・スロープ状踏み台の増設・トイレへのアプローチに対する配慮等を計画実施していき、高齢者や子供・身障者等の弱者に優しい公開施設としてさらなる充実を図っていく予定です。また、展示空間の更なる充実も合わせて図っていく予定です。でご期待ください。（教育普及係 大澤 健）

昨年秋のアンケートから

〔1〕はじめに

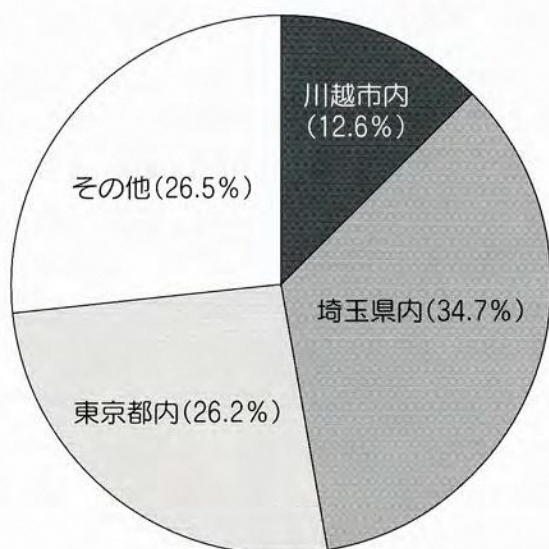
川越市立博物館では入館者の動向を知り、将来の事業の指標とするため昨年秋に入館者アンケートを実施しました。期間は平成7年10月1日～31日までの1ヵ月間で、入館者総数、アンケート回答数は表1のとおりです。入館者総数に対するアンケート回答率は8.5%ですが、来館者の傾向は示していると思われます。

今回は10項目に渡る質問を設けましたが、紙数の関係上、ご意見と、市内と市外の来館者で相違が顕著な来館回数・動機を中心にまとめてみたいと思います。

なお実施期間は特別展、「酒井忠勝にみる近世大名の姿—川越藩祖酒井家ゆかりの品々—」の開催中でした。

	入館者数	アンケート回答数 ()回答数内比率	回答率
大人	15,050人	1,249人 (77.9%)	8.3%
学生 生徒	2,026人	194人 (12.1%)	9.6%
児童	1,711人	161人 (10.0%)	9.4%
合計	18,787人	1,604人 (100.0%)	8.5%

表1 アンケート回答数・回答率表



グラフ1 来館者住所

〔2〕来館者の構成

来館者の職業は会社員等サラリーマンが約3割、主婦・学生がそれぞれ2割強でした。学生の多くは小・中学生(18%)で、高校生、大学生の利用は4%でした。

前回アンケートの時(H3.4.2～6.30)よりも県外からの来館者が2割増大し、半分を越えています(グラフ1)。

〔3〕博物館の利用のしかた

博物館の来館回数、目的、動機は市民と市外在住者とでは違いが見られます。

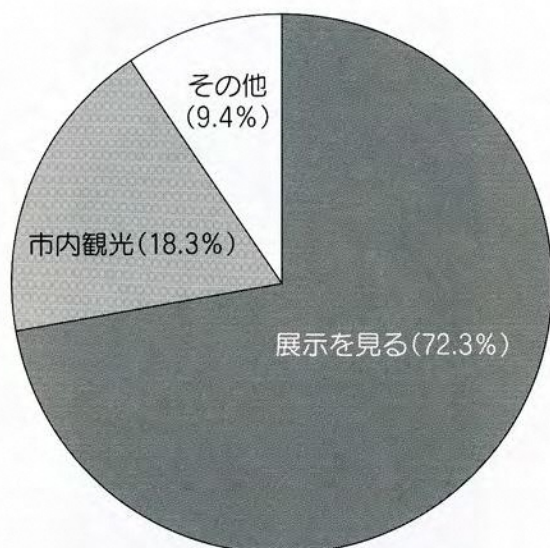
市民は複数来館率が高く、2回以上の来館が6割を越えました。また5回以上の来館も1/4以上ありました。目的では展示観覧の為の来館が7割強と高い割合でした(グラフ2)。また動機においては広報をみて来館する率が半数と高く、企画展の開催など、博物館の情報を市民に伝えるうえで広報の力が大きいことがわかります(グラフ4)。

これに対して市外在住者は、初めて来館する人が8割以上を占めています。マスコミに取り上げられることが多くなったこともあり、観光目的の来館の割合が大きく、歴史観光都市として川越が認識されていると言えます(グラフ3)。しかし、反面、年4回以上の企画展示を催している当館において、展示を見るという博物館本来の来館目的が少ないのは残念です。市外在住者の来館動機として観光コースに従っての来館が多いのは上記の理由からも当然ですが、人の紹介によって来館する割合が1/4近くあるのは、当館が好評を得ていると言えるでしょう(グラフ5)。

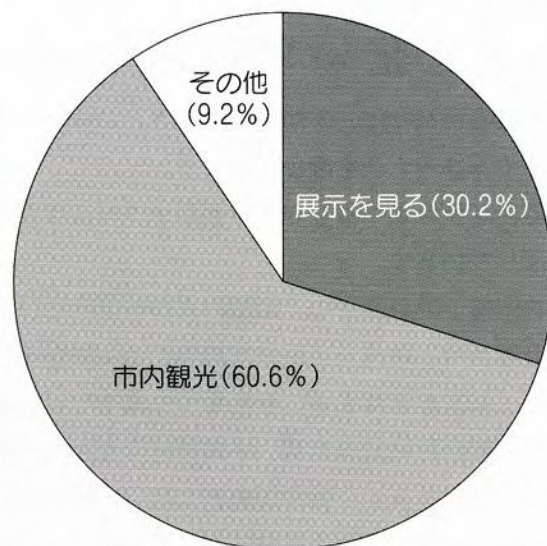
〔4〕来館者の感想

常設展示、企画展示の感想は「わかりやすい」と「ふつう」をあわせて95%程度。来館者の年齢構成にムラが少なかったことを考慮すると満足できる結果と言えます。館内の雰囲気は「よい」が74%、「ふつう」をあわせて96%でした。

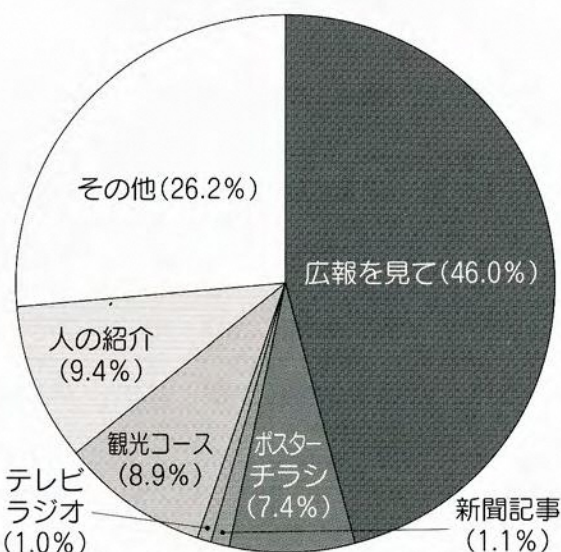
御意見の記入欄には「きれいである」、「解説員



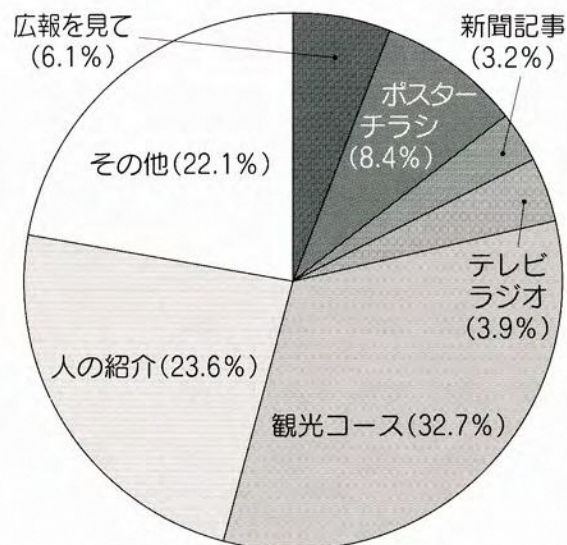
グラフ 2 来館目的(市内在住者)



グラフ 3 来館目的(市外在住者)



グラフ 4 来館動機(市内在住者)



グラフ 5 来館動機(市外在住者)

が親切である」、などがありました。また「団体客の私語が目立つ」という意見が目につきました。団体観光客、学校利用が多いゆえの結果ですが、来館者各自のモラルに期待したいところです。また「照明が暗い」というご指摘がありました。博物館の資料のなかには環境の変化に弱く、光・熱にさらされると、劣化するものがあります。照度を落としているのは資料の劣化を防ぐためです。博物館には資料を展示し一般の利用に供するという役目と、資料を保存し後世に伝えるという相反する役目があります。暗く感じる事もあると思われかもしれませんがご理解頂きたいと思います。

〔5〕 おわりに

今回のアンケートは1ヵ月間という限定された期間で、なおかつ回答率も高いとは言えませんが、この結果は観光目的の来館割合が大きい当館の現状を示していると言えます。また全部は紹介できませんでしたが意見・要望欄に貴重な御指摘を頂きました。今後の博物館運営に参考とさせていただきます。

最後にアンケートにご協力下さった方々にお礼申し上げます。

(学芸係 荻野将盛)

……ただいま展示中……

民俗展示室では、季節毎にふるさとのまつりを紹介するコーナーを設けています。

現在は秋のまつりとして今福のまつりばやしを展示しています。

神田囃子の系譜を引く川越のまつりばやしは、中台地区の王蔵流、上尾の堤崎流、今福の芝金杉流の三系統があります。今福まつりばやしは、地区内の菅原神社の春祈禱、平野神社の夏の天王様などに出演します。秋の川越祭では、六軒町の山車に乗り込み、華やかな囃子を披露します。今年の10月14、15日には、是非実際にご覧下さい。



展示期間 7月16日～10月10日

❖ 平成7年度 利用状況 ❖

月	一 般			団 体			共 通			そ の 他			合 計
	大 人	学 生・生 徒	児 童	大 人	学 生・生 徒	児 童	大 人	学 生・生 徒	児 童	他館購入	招 待	免 除	
4月	2,805	204	532	392	6	3	3,118	98	221	4,429	167	1,332	13,307
5月	3,657	431	494	381	1	1	4,428	275	268	6,546	153	8,553	25,188
6月	1,902	205	247	1,003	0	111	3,528	118	182	3,146	80	9,093	19,615
7月	1,288	112	214	77	0	51	1,585	58	52	1,449	42	523	5,451
8月	3,114	614	712	189	28	114	1,743	184	254	2,111	183	1,068	10,314
9月	2,384	196	265	400	0	43	2,245	533	103	2,947	162	2,475	11,753
10月	3,847	432	277	739	211	112	3,458	100	236	5,297	186	3,892	18,787
11月	3,909	348	338	841	14	2	3,421	164	113	4,911	395	7,855	22,311
12月	1,353	110	119	143	0	0	1,351	51	28	1,071	265	3,651	8,142
1月	2,357	128	399	658	35	89	1,487	45	102	1,652	154	2,714	9,820
2月	1,835	276	275	334	0	0	1,637	120	109	2,273	54	6,249	13,162
3月	2,300	182	312	399	1	4	2,058	90	187	2,889	74	1,979	10,475
合計	30,751	3,238	4,184	5,556	296	530	30,059	1,836	1,855	38,721	1,915	49,384	168,325

発行日 平成8年8月30日

発行 川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号 ☎0492-22-5399